

序

感染症診療の勉強、なかでも抗菌薬の勉強は、いつの時代も医学生・研修医にとっては悩みの種です。抗菌薬を扱っている書籍はたくさんあるはずなのですが、どうもみなさん苦手意識をもつてしまうようです。

なぜでしょうか？

それは、抗菌薬の構造・対象となる微生物・用法用量・対象となる疾患…と整理して学んでいっても、その知識を臨床の現場で生かすのが難しいからです。もう一つ問題となるのは、「臨床の現場では教科書には答えが書かれていらないような問題が驚くほど多くある」ということです。多くは臨床上の判断、例えば診断・治療・経過観察・副作用発生時の対応…などですが、こうした臨床の現場で日々湧き起こってくる素朴な疑問は、本人にとっては深刻な問題なのに、答えが得られにくいのです。

これはなかなか根深い問題です。

そこで本書では、抗菌薬治療に関連して臨床の現場で日々湧き起こつくる素朴な疑問を丸ごととりあげることにしました。現場で起こる疑問には、現場の第一線の先生方に答えていただくのが一番です。そこで、今現在感染症の診療と医師・医学生教育に関わっている若手感染症医の方々にご執筆いただきました。彼らもそれほど遠くない昔には医学生であり研修医でもありました。自分たちがぶつかった疑問は、後輩医師たちにとっても大きな障壁となることを彼らはよく知っています。そして自分たちの実践のなかで、科学的知見を基礎としつつもそれを現場のあり方に的確にあてはめることによって、こうした疑問を解決しています。そして最も重要なことですが、現場の医師としての瑞々しい感性をもっています。回答者としてこれほどふさわしい方々はいないでしょう。

執筆者の方々の努力の結果として、本書では感染症診療における考え方を非常に豊かに表現し伝えることが可能となりました。「感染症の診療＝抗菌薬の選択」と非常に薄いとらえられ方をすることがあります、決してそうではないことがわかつていただけるはずです。

本書を読むことで、抗菌薬治療はそれだけが切り離されて存在するのではなく、感染症診療の一連の流れからとらえるべきものであることをぜひ知っていただければと思います。感染症診療の流れのなかの一コマ一コマに各抗菌薬を織り込んでいければ、抗菌薬の知識は単に紙上の情報ではなく、臨床に生かせる知識として身についていくはずです。「抗菌薬の疑問」は実は「感染症臨床」の疑問なのです。読者の方々がこうした疑問を一つずつ解決していくことによって、やがては抗菌薬を自由に使いこなせる日が来ることを心から望んでいます。

2009年9月

大曲貴夫